

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	田中 秀紀
論文題目	遊戯療法における遊ぶことについての心理臨床学的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文では、遊戯療法における遊ぶことについて捉え直すことが試みられた。</p> <p>序論では、遊戯療法の理論には、精神分析・ユング心理学・人間性心理学の三つがあると紹介され、これらの理論の特徴を並べたり、共通点を抽出したりするのみでは、十分な理論的検討がなされていないと指摘された。そして遊ぶことについて言語化し、そこから遊戯療法を捉える作業が不十分であることが挙げられた。</p> <p>第1章では、遊戯療法の理論を批判的に検討し、次に、遊戯療法事例を通じて遊ぶことそれ自体の働きを検討するという本研究の方法論が示された。</p> <p>遊ぶことの理論的検討として、まず、Huizinga,J.の遊び論が取り上げられた。次に、人間性心理学から遊ぶことを捉える試みとして、Gendlin,E.の体験過程理論を援用した弘中の仕事を批判的に検討した。</p> <p>第2章では、精神分析から遊ぶことが捉えられた。Klein,M.をはじめとする精神分析家は、遊ぶことを遊戯療法の根幹に据えた。遊ぶことは、いかに個として生きるのかという課題と、内的現実と外的現実をどのように関係づけていくのかという課題への、主体の取り組みであると考えられた。遊ぶことでは、主体が内的な現実性<sup>リアリティ</sup>に入る動きとともに、その内的な現実性を否定する動きがあると考察された。</p> <p>第3章では、ユング心理学における遊ぶことが検討された。第一質料が遊びによって形を与えられることで、イメージが対自的なものとなると同時に、主体からそのイメージに関わる動きが生じると考えられた。また、遊ぶ場所を閉じることで、神話的主体のあり方を去り、魂と距離を作りつつ魂と関わる近代意識のあり方への移行が生じると考えられた。</p> <p>第4章では、事例を通じて「自閉症児における遊ぶことの生成」について検討された。母から分離し否定を被った主体が生まれる遊びが生じ、これを機にクライアントは主体の構造を分節化していく遊びを展開した。そして身体像としての主体と、主体的に言葉を発する主体が、同時に生まれる遊びがクライアントの主体を生成させると考えられた。</p> <p>第5章では、「語る主体」と「語られる主体」という視点をもとに、不登校児の事例が検討された。競い合う遊びを通じて、クライアントは衝動を対象化する「語る主体」を練り上げ、また競い合う遊びの《結果》である「語られる主体」も引き受ける作業がなされた。これらを通じて「語る主体と結びついた語られる主体」が生成したと考察された。</p> <p>第6章では、事例を通じて「遊ぶことにおける入る動きと否定する動き」について検討された。無垢な世界に包まれ、攻撃性を避けるあり方を示していたクライアントは、赤ちゃんの絵を描くことを通じて、母に包まれる世界の現実性<sup>リアリティ</sup>に深く入り、</p>			

それと同時にそのイメージから距離を取り全体として捉える主体が生じたと考えられた。そして「怖いもの」の箱庭を制作することで、クライアントに怖いものを対象化しつつ、怖いものの現実性リアリティにより深く入る動きが生じたと考えられた。

第7章では、まとめとして、遊戯療法における遊ぶことを心理臨床学的に考察することが試みられた。遊戯療法において遊ぶことが生じると、クライアントのあり方が対象化され、遊ぶことの中にクライアントのあり方が閉じられることが示唆された。そして、遊戯療法における遊ぶことは、主体を即自的に囚えていたものに主体が入ることで、それを主体自ら否定する弁証法的な動きであることが示唆された。続いて、遊戯療法においては、遊ぶことに進んで入ることによって、遊ぶこと自体が消える運動であり、同時に遊ぶことの形式がより高次の形式で主体に引き継がれる弁証法的な運動であると捉えられた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、遊戯療法における遊ぶことについて、心理臨床学的な観点から、根本的に捉え直そうとする、意欲的な論考である。

序論では、遊戯療法の理論について、精神分析・ユング心理学・人間性心理学の三つを挙げたうえで、理論の特徴を並べたり、共通点を抽出したりするだけでは、遊ぶことについての十分な理論的検討がなされたことにならないことが指摘された。さらに、Huizinga,J.の遊び論が取り上げられ、また、人間性心理学から遊ぶことを捉える試みとして、Gendlin,E.の体験過程理論を援用した弘中の仕事を検討している。

このように、本論文は、遊ぶことについてのこれまでの理論をおさえたとはいえず、それらを批判的に検討することで新たな地平を開こうとしているところに特徴がある。特に、各理論を並列的に捉えるのではなく、遊ぶことに内在するダイナミックな動きを捉えようとするところに、本論文の独自性が存在する。

第2章では精神分析から、そして第3章ではユング心理学から、遊ぶことが捉えられた。Klein,M.をはじめとする精神分析家は、遊ぶことを遊戯療法の根幹に据えたが、遊ぶことは、いかに個として生きるのかという課題と、内的現実と外的現実をどのように関係づけていくのかという課題への、主体の取り組みであると指摘する。また、遊ぶことでは、主体が内的な現実性<sup>リアリティ</sup>に入る動きとともに、その内的な現実性を否定する動きがあると考察された。続く第3章では、ユング心理学における遊ぶことが検討され、第一質料が遊びによって形を与えられることで、イメージが対自的なものとなると同時に、主体からそのイメージに関わる動きが生じると考察された。遊ぶ「こと」についての根本的で深い論考もまた、本論文を特徴づけるものである。

第4章から第6章では、事例を通じて遊ぶことそれ自体の働きが検討される。単なる理論研究に留まらず、豊富な経験に基づいた事例を基にした研究アプローチがなされていることは、心理臨床にこの研究を生かすうえでも、重要なアプローチといえよう。第4章では、「自閉症児における遊ぶことの生成」について検討され、第5章では、不登校児の事例が検討されている。これらの事例検討では、遊びの展開のなかから、主体が生成するプロセスが描かれ、遊ぶことによる主体の生成の様相が事例を通して具体的に示された。また第6章では、「遊ぶことにおける入る動きと否定する動き」について検討されている。無垢な世界に包まれ、攻撃性を避けるあり方を示していたクライアントは、赤ちゃんの絵を描くことを通じて、母に包まれる世界の現実性<sup>リアリティ</sup>に深く入り、それと同時にそのイメージから距離を取るといって、対立する二つの動きが同時に立ち上がる様子を、説得力をもって示すことに成功している。

最後に、遊戯療法における「遊ぶこと」は、それに進んで入ることによって、遊ぶこと自体が消える運動であり、同時に遊ぶことの形式がより高次の形式で主体に

引き継がれる弁証法的な運動であると結論づけられた。遊ぶことについて、運動という側面からとらえた本論文は、遊戯療法に関する論考のなかでも、価値あるものとして位置づけられよう。

本論文の中では、クライアントが遊ぶことについて検討されていたが、セラピストが遊ぶことはどうなるのだろうかということが、試問において議論された。また、遊べるということから主体の出現に至るという本論文の展開に関して、より精緻な論考を期待したいという意見もあった。

しかし、こうした指摘は本論文のさらなる発展性を視野に入れたものであり、本論文の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降